

「生の流儀 (Way of Life)」としての文化

—— ボアズ派人類学のアメリカ的転回 (1) ——

沼 崎 一 郎

は じ め に

本稿の目的は、フランツ・ボアズ (Franz Boas) の後継者たちが、1920 年代から 40 年代にかけて、ボアズの文化観 (沼崎 2013, 2014, 2016) を如何に継承し、また如何に変容させたかを、“way of life” という用語の使われ方に注目することによって明らかにしようとするものである。その理由は、ボアズの著作には“way of life” という用語が見当たらないにもかかわらず、文化とは“way of life” であるという主張が 1940 年代にはアメリカ人類学で一般化したからである。なぜ、ボアズの後継者たちは、文化を“way of life” と呼ぶようになったのか。そこには、20 世紀前半のアメリカ特有の理由があるのではないか。ここに筆者の問題意識がある。

オックスフォード英語辞典は、“way of life” という表現を成句として収録しており、特に“habit” (習癖) に関連する用法として以下の 3 つがあると説明している (OED Online 2016) :

- (i) A settled or habitual pattern of behaviour followed by a person or group.
- (ii) A condition, activity, or principle that habitually guides or governs one's actions ; a dominating interest, occupation, or goal.
- (iii) Something which is used habitually.

上記 (i) は、個人の習癖または集団の慣習である。この意味について収録されている用例は 17 世紀に遡る。上記 (ii) は、生活の中心となる活動およびその原理である。この用例の収録範囲は 19 世紀後半からであり、シカゴ学派の社会学者ルイス・ワースの古典的な論文の表題 “Urbanism as A Way of Life” (Wirth 1938) が、この意味での用例と

して収録されているのは興味深い。上記 (iii) は、個人または集団が常用する物を指す。たとえば、スマートフォンは現代社会の “way of life” と言える。この意味での用例は 19 世紀末から現代のものまでが収録されている。

単に集団の慣習を意味する “way of life” の使用は、エドワード・バーネット・タイラー (Edward Burnett Tylor) の『人類学』(Tylor 1881) にも見られる。たとえば、以下の文章における “way of life” の用法がそうである (Tylor 1881: 31, 強調は引用者):

In Central France especially, the examination of such bone-caves has brought to light evidence of the whole *way of life* of a group of ancient tribes.

ここでタイラーは特定民族集団の慣習の総体を “the whole way of life” と呼んでいるわけだが、タイラーにとって、それは、より包括的かつ人類史的な「複合的総体 (complex whole)」としての文化あるいは文明の部分的な構成要素に過ぎず、それゆえ “way of life” は概念的に文化と等置できるものではなかった。そして、タイラー以後のイギリス社会人類学においては、文化概念の重要性そのものが相対的に低下したため、“way of life” が日常語以上の意味を獲得することはなかった。

これに対して、1940 年代以後のアメリカ人類学においては、“way of life” は、OED の挙げる上記 (i) ないし (ii) 以上の意味を持ち、人類学的な「文化」の定義ないし説明における鍵概念となった。文化とは “way of life” なのだという捉え方こそが 20 世紀アメリカ人類学を特徴づけると言っても過言ではない¹。1980 年代後半以降、アメリカ人類学では「文化」概念の問い直しが進んでいるが、一般的な人類学の教科書においては、今でも人類学的な「文化」の定義として “way of life” という表現が用いられている²。

そこで、本稿では、文化とは “way of life” であるという認識が如何にしてアメリカ人類学に生まれたのか、その学問的、歴史的、社会的背景を探ってみたい。そうすること

¹ 1970 年代後半から 80 年代にかけてアメリカの大学・大学院で人類学を学んだ筆者も、文化とは何かと問われれば、それはひとつの “way of life” だと答える習慣が、いつのまにか身についていた。

² たとえば、ベイリーとピーブルズは、その著 *Essentials of Cultural Anthropology* において、“When broadly defined, culture refers to the whole *way of life* of some group of peoples” と書いている (Bailey and Peoples 2013: 21, 強調は引用者)。ナンダとワームズは、その著 *Culture Counts: A Concise Introduction to Cultural Anthropology* において、文化を “The learned behaviors and symbols that allow people to live in groups, the primary means by which humans adapt to their environment, the *ways of life* characteristic of a particular human society” と欄外の註で定義している (Nanda and Warms 2014: 5, 強調は引用者)。

によって、ボアズ派人類学の継承と、そのアメリカ的転回の様子を明らかにしていきたいのである。

なお、表題に示したとおり、“way of life”を「生の流儀」と訳したいと筆者は考えている。その理由を示すことも、本稿の課題とる。

Ⅰ フランツ・ボアズにおける“mode of life”

フランツ・ボアズは、文化の定義を明示した 1938 年の『未開人の心性』改訂版 (Boas 1965 [1938]) において、“way of life”ではなく、“mode of life”³ という表現を何度か用いている。そのなかには、個別民族文化と同義に用いているのではないかと思われるものもある。たとえば、第 1 章「序論」冒頭の次のような用法である (Boas 1965 [1938]: 19, 強調は引用者):

The Chinese, the native New Zealander, the African Negro, the American Indian present not only distinctive bodily features, but each possesses also *his own peculiar mode of life*. Each human type seems to have its own inventions, its own customs and beliefs, . . .

上記の文章で“mode of life”が指すのは、個々の民族が有する「独自の発明、慣習、信念 (its own inventions, its own customs and beliefs)」(Boas 1965 [1938]: 19) であり、一言で言えば「文化的生活 (cultural life)」である。

しかしながら、文化の定義を提示した第 9 章「初期文化特性」では、人間以外の動物の“mode of life”に言及しつつ、ボアズは次のように述べている (Boas 1965 [1938]: 152, 強調は引用者):

We do not designate the activities of animals as culture, no matter whether they are purposive, or whether they are organically determined or learned. We rather speak of “mode of life” or “habits” of animals.

³ なお、オックスフォード英語辞典 (OEDictionary Online2016) の“mode”の項目には、“mode of life”という表現は成句として収録されていない。

そうすると, “mode of life” は, 文化と同義ではなく, 文化よりも広義の概念だということになる。ボアズにとって, 人間文化の特徴は, 理性と倫理観を備えている点, そしてそれゆえに進歩を可能とする点にあった (沼崎 2014)。動物には理性も倫理観もないのであるから, 文化を持つとは言えないのだ。ただし, ボアズは “mode of life” と文化の間に明瞭な線引きをすることは難しいとも述べている (Boas 1965 [1938] : 152)。

ボアズは, 人文主義的で進歩主義的な文化観を保持していたので, 理性とその働きを人間文化の中心に据えていた (沼崎 2016)。それゆえ, ボアズにおいて, “mode of life” は文化の定義とはなりえなかったと思われる。

しかし, “mode of life” を文化と等置する伝統が, アメリカ人類学には存在する。

ボアズ以前には, タイラーとともに進化主義人類学の双璧をなすルイス・ヘンリー・モルガン (Lewis Henry Morgan) が 1877 年の『古代社会』において, 文化を “mode of life” と言い換えている (Morgan 1985 [1877] : 9, 強調は引用者) :

Each of those about to be proposed will be found to cover *a distinct culture*, and to represent *a particular mode of life*.

モルガンは, 進化の各段階を特徴づける独特の文化があり, それは単一で特定の “mode of life” だと述べているのである。

ボアズより 12 才若い, ボアズとともに草創期アメリカ人類学の中心的存在であったクラーク・ウィスラー (Clark Wissler) も, 1923 年の『人間と文化』において, 次のように述べている (Wissler 1923 : 1, 強調は引用者) :

... in history and social science *we speak of the mode of life of this and that people as their culture*. Thus the Eskimo and Hottentot have no less each a culture of their own, than the French or the English.

ウィスラーは, 1929 年の『社会人類学入門』においても “the mode of life followed by the community or the tribe is regarded as a culture” (Wissler 1929 : 15) と述べている。そして, ウィスラーは, 文化とは「慣行化された習癖 (the conventionalized habits)」(Wissler 1929 : 12) あるいは「標準化された社会的手続き (standardized social procedures)」(Wissler

1929: 15) であるとも述べていることから, “mode of life” に規範的な意味合いを持たせていると見なすことができる。

興味深いことに, 文化の定義の収集と整理を行ったアルフレッド・クローバー (Alfred Kroeber) とクライド・クラックホーン (Clyde Kluckhohn) は, 文化は共同体ないし部族の “mode of life” であるというウィスラーの定義を, 文化を “way of life” だと規定する他の人類学者の諸定義とともに, “rule or way” を強調する規範的定義に分類している (Kroeber and Kluckhohn 1963 [1952]: 95-98)。

そして, クローバーとクラックホーンは, “mode” と “way” をほぼ同義に捉え, その意味を次のように説明している (Kroeber and Kluckhohn 1963 [1952]: 98):

Wissler's 1929 statement, “the mode of life followed by the community” sets the pattern. It is the old “custom” concept (cf. Group A), raised from its pluralistic connotations into a totalizing generalization. The word “mode” or “way” can imply (a) common or shared patterns; (b) sanctions for failure to follow the rules; (c) a manner, a “how” of behaving; (d) social “blueprints” for action.

先ず注目すべきは, 自他ともにボアズ派と認めるクローバーとクラックホーンが, “way of life” という用法の源流を, ボアズ派には属さないクラーク・ウィスラーに辿っていることである。既に述べたように, ウィスラーの用法は, さらにモルガンに辿ることができる。そうすると, “way of life” としての文化という捉え方は, ボアズ以前のアメリカ民族学の文化観を引き継ぐものである可能性が出てくる⁴。

次に注目すべきは, クローバーとクラックホーンが “mode” と “way” をほぼ同義と捉え, どちらも慣習概念の「総体的一般化 (a totalizing generalization)」であると指摘する点である。しかし, 筆者には, “mode” と “way” が同義であるとは思えない。なぜなら, アメリカ人類学における “way of life” の用法には, 人類学の外からの影響も見られ, 規範以上の意味が加わっているからである。

⁴ この点については一層の探求が必要であるが, 本稿では可能性を指摘するに留めておきたい。

Ⅱ 1920～30 年代における “way of life” の用法

その点を論ずる前に、1920 年代から 30 年代にかけて、ボアズの弟子たちが “way of life” という表現をどのように用いていたかを見ておきたい。ここで注目するのは、エドワード・サピア (Edward Sapir)、マーガレット・ミード (Margaret Mead)、ルース・ベネディクト (Ruth Benedict) の著作における “way of life” の用法である。

1. エドワード・サピア

最初に取り上げるのは、人類学においてのみならず、社会学や文学の分野においても一世を風靡したエドワード・サピアの論文「文化、本物と偽物」(Sapir 1924) である。

このなかで、“way of life” が “manner” と対比されて登場する箇所がある (Sapir 1924 : 418, 強調は引用者) :

An automatic perpetuation of standardized values, not subject to the constant remodeling of individuals willing to put some part of themselves into the forms they receive from their predecessors, leads to the dominance of impersonal formulas. The individual is left out in the cold ; *the culture becomes a manner rather than a way of life, it ceases to be genuine.*

ここで、“a way of life” ではなく “a manner” に過ぎないならば文化は本物 (genuine) でなくなるという末尾の 1 文が注目に値する。サピアにとって、“a way of life” とは「本物の文化 (genuine culture)」なのである。

サピアによると、「本物の文化」とは次のようなものである (Sapir 1924 : 410) :

The genuine culture is not of necessity either higher or lower ; it is merely inherently harmonious, balanced, self-satisfactory. . . It is the expression of a richly varied and yet somehow unified and consistent attitude toward life, an attitude which sees the significance of any one element of civilization in its relation to all others. It is, ideally speaking, a culture in which nothing is spiritually meaningless, in which no important part of the general functioning brings with it a sense of frustration, or misdirected or unsympa-

thetic effort.

そして、「本物の文化」は「その保持者に内的な充実感すなわち霊的な達成感を与える (gives its bearers a sense of inner satisfaction, a feeling of spiritual mastery)」(Sapir 1924: 420)。

以上から、サピアにとって、“way of life”とは、伝統が個人に提供し、かつ個人が創造的に参加する「本物の文化」であり、それは社会にとっても個人にとっても、精神的あるいは霊的に価値のある生き方だということが理解できよう。

これに対して、どんなに機能的で効率的な文化であっても、その文化を生きることが個人に精神的な充実感や霊的な達成感を抱かせることがなく、個人の創造性を抑圧し、疎外感を抱かせるならば、それは「偽物の文化 (spurious culture)」であって、“way of life”と呼ぶには値しないのである⁵。

2. マーガレット・ミード

こうしたサピアの文化観の影響を強く受けているのが、マーガレット・ミードとルース・ベネディクトである (Darnell 2010)。この3者は、文学への関心を通して深いつながりがあり、個人的な関係も極めて密接であった。

そして、1920年代後半から1930年代前半にかけて、広く読まれた著作のなかで“way of life”という表現を用いたのが、マーガレット・ミードとルース・ベネディクトであった。ベネディクトのほうがミードより年長であり、ボアズの下での学位取得もベネディクトのほうが早いですが、単著を世に問うたのはミードのほうが先である。ミードの『サモアにおける成人』(Mead 2001 [1928])と『ニューギニアにおける生育』(Mead 2001

⁵ 1938年の論文「なぜ文化人類学は精神分析家を必要とするか」においては、サピアは個別民族文化の代名詞として“way of life”を用いている (Sapir 1985 [1949]: 569, 強調は引用者):

Cultural anthropology was conceived of as a social science which concerned itself little, if at all, with the individual. Its province was rather to emphasize those aspects of behavior which belonged to society as such, more particularly societies of the dim past or exotic societies whose *way of life* seemed so different from that of our own people that one could hope to construct a generalized picture of the life of society at large, ...

ここでサピアは、必ずしも「本物の文化」を意味して“way of life”を用いてはいないだろう。しかし、“way of life”という表現には常に本物感が含意されていると筆者は見ている。

[1930]) の刊行が 1928 年と 1930 年であるのに対して、ベネディクトの『文化の諸様式』(Benedict 2005 [1934]) の刊行は 1934 年である。そこで、まずミードの著作を検討する。

ミードの『サモアにおける成人』は、サモアの少女の思春期に関するエスノグラフィーであるが、サモアという「未開社会」を鏡としてアメリカ社会における青少年教育を再考し改革するという明確な意図の下に書かれている。サモアとアメリカとの対比という文脈で、ミードは“way of life”という表現を用いている (Mead 2001 [1928]: 8, 挿入と強調は引用者):

From these contrasts [with primitive groups], which are vivid enough to startle and enlighten those accustomed to *our own way of life*, and simple enough to be grasped quickly, it is possible to learn many things about the effect of a civilisation upon the individuals within it.

また、ミードは、次のようにも述べている (Mead 2001 [1928]: 8, 挿入と強調は引用者):

It [a description of Samoan girls] should also give the reader some conception of a different and contrasting civilisation, *another way of life*, which other members of the human race have found satisfactory and gracious.

もうひとつの“way of life”は、アメリカ人から見れば遅れて粗末で奇異なものかもしれないが、サモア人にとっては「申し分なく上品な (satisfactory and gracious)」なものである。つまり、「本物の文化」なのだ。

そして、もうひとつの“way of life”を知ることで、我々の“way of life”の相対性に気づくことができる (Mead 2001 [1928]: 160, 強調は引用者):

Realising that *our own ways* are not humanly inevitable nor God-ordained, but are the fruit of a long and turbulent history, we may well examine in turn all of our institutions, *thrown into strong relief against the history of other civilisations*, and weighing them in the balance, be not afraid to find them wanting.

この文章は「自分の基準で自分を判断してはいけない、相手の立場から自分を見直すべきだ」というフランツ・ボアズの文明相対主義（沼崎 2016 : 140）を忠実に反映しているが、そのなかでミードが“our own ways”という表現を使っている点を強調しておきたい。

『ニューギニアにおける生育』では、ミードは人間心性の統一性と人間文化の多様性を、次のように表現している（Mead 2001 [1930] : 6, 強調は引用者）：

Within the generous lines laid down by the early patterns of thought and behavior which seem to form our common human inheritance, countless generations of men have experimented with the possibilities of human spirit. It only remained for those of inquiring mind, alive to the value of these hoary experiments, to read the answers written down in *the ways of life of different peoples*.

ミードは“solutions of life’s problems different from our own”（Mead 2001 [1930] : 7）という表現も用いているが、これは“the ways of life of different peoples”と同義であろう。また、ミードは“own canons”と“own way of life”を等置している（Mead 2001 [1930] : 7）。

さらに注目すべきは、ミードが個人の生き方についても“way of life”を用いている箇所があることだ（Mead 2001 [1930] : 9, 171）。既に指摘したように、サピアは集団の“way of life”への個人の創造的参加と寄与を強調していたが、ミードにおいても“way of life”は社会的であると同時に個人的でもあるのだ。

サピアにおいてもミードにおいても、また先取りするならベネディクトにおいても、“our way”が心底“my way”であり、かつ“my way”がそのまま“our way”である時、そしてその時に限り、“way of life”は「本物の文化」と見なせるのである。

3. ルース・ベネディクト

ミードの著書も大きな反響を呼んだが、ベネディクトの『文化の諸様式』（Benedict 2005 [1934]）に対する反響はそれ以上であった。ミードによれば、「親から子へと伝えられる学習された行動の体系的集合（the systematic body of learned behavior which is transmitted from parents to children）」としての文化という人類学的概念が広く一般に普

及し、誰もが「我々の文化では」などと普通に口走るようになったのは、本書のおかげである (Mead 2005 [1959]: xiii)。

2005 年の再刊に際して序文を寄せたルイーズ・ランフェール (Louise Lamphere) は、次のように述べている (Lamphere 2005: ix, 強調は引用者):

... the book shaped anthropology, popularized the term “culture,” and led the Western readers to an appreciation of *other ways of life*.

この 1 文に筆者が注目するのは、ランフェールが “way of life” という表現を文化と同義に用い, “other ways of life” を理解し尊重することの重要性を教えたのは本書だと述べているからである。しかし、ベネディクト自身は、本書で文化と “way of life” を必ずしも同義には用いていない。しかも, “way of life” という表現を頻用しているわけではない。そこで、ベネディクトの用法を少し丁寧に検討してみたい。

『文化の諸様式』において, “way of life” という表現は 7 箇所に見られる (Benedict 2005 [1934]: 5-6, 66, 80, 126, 129, 179, 250)。ベネディクトは、大きく分けて 2 つの異なる意味で “way of life” という表現を用いているようだ。ひとつは、ある集団に特有の慣習あるいは基準という意味である。もうひとつは、生に対する態度あるいは姿勢としての生き方という意味である。

第 1 の意味での用例は、次のようなものである (Benedict 2005 [1934]: 5-6, 挿入と強調は引用者):

He [the white man] knows little of *any ways of life but his own*. The uniformity of custom, of outlook, that he sees spread about him seems convincing enough, and conceals from him the fact that it is after all an historical accident. He accepts without more ado the equivalence of human nature and *his own cultural standards*.

ここでは, “ways of life” は “cultural standards” とほぼ同義に用いられている。

ひとつの民族の文化について, 複数形で “ways of life” が用いられている個所もある (Benedict 2005 [1934]: 66, 強調は引用者):

All Zuñi awaits the granting of rain during these days, and priests blessed with rain are greeted and thanked by everyone upon the street after their retreat is ended. They have blessed their people with more than rain. They have upheld them *in all their ways of life*.

雨乞いに成功した祈祷師たちは、ズニに雨をもたらしただけでなく、そのことでズニの慣習の全てを、すなわちズニ文化を守ったのだとベネディクトは言うのだが、ここではズニ文化が“a way of life”ではなく“their ways of life”と表現されているのである。

クワキウトルの儀礼を取り上げた箇所でも、儀礼を受けた者が「通常の慣習を全て忘れたふりをした (feigned to have forgotten all the ordinary ways of life)」(Benedict 2005 [1934]: 179) という記述があるが、クワキウトル文化に含まれる諸慣習という意味で複数形の“ways of life”が用いられているわけである。

第 2 の意味での用例は、次のようなものである (Benedict 2005 [1934]: 80, 挿入と強調は引用者):

Apollonian institutions have been carried much further in the pueblos [the Zuñi] than in Greece. Greece was by no means as single-minded. In particular, Greece did not carry out as the Pueblos [the Zuñi] have the distrust of individualism that *the Apollonian way of life* implies, but which in Greece was scanted because of forces with which it came in conflict. Zuñi ideals and institutions on the other hand are rigorous on this point.

ここで、ズニの人々は、中庸、調和、穏健を重んじ、感情を抑制し、保守的な生き方を文化のあらゆる側面で貫いているとベネディクトは見るわけだが、そのような生に対する態度または姿勢を「アポロ流」⁶の“way of life”と呼んだのである。次の 1 節も、同様

⁶ 米山俊直は“the Apollonian way of life”を「アポロ型の生活方法」(ベネディクト 2008 [1973]: 117)と訳しているが、ここでベネディクトは“way of life”を「生に対する態度または姿勢」と捉えているのであって、その態度または姿勢がニーチェの言うアポロ的人間のそれに近いと論じているのである。それゆえ、筆者は“the Apollonian”を「アポロ流」と訳したい。「型」と訳してしまうと、どうしてもシュペングラーによる文明の対比的類型化、あるいはディルタイによる哲学の類型把握を連想させてしまう。ベネディクト自身が『文化の諸様式』でシュペングラーやディルタイに言及しているのであるが、

の “way of life” の用法を示している (Benedict 2005 [1934] : 129, 挿入と強調は引用者) :

... they [the Zuñi] are singularly consistent. The ones that are out of place they have outlawed from their universe. They have made, in one small but long-established cultural island in North America, a civilization whose forms are dictated by the typical choices of the Apollonian, all of whose delight is in formality and *whose way of life is the way of measure and sobriety*.

「アポロ流」の「生に対する態度と姿勢」を持つズニは、「節度と穏当 (measure and sobriety)」を “way of life” として貫いており、それがズニ文化の様式 (pattern) なのである。

ドブ島民に関する記述にも、同様の用例がある (Benedict 2005 [1934] : 250, 強調は引用者) :

The one *way of life* which the Dobuan regards as basic in human nature is one that is fundamentally treacherous and safeguarded with morbid fears.

最後に、個人の生に対する態度または姿勢として “way of life” が用いられている箇所がある (Benedict 2005 [1934] : 126, 強調は引用者) :

Chastity as a way of life is regarded with great disfavor, and no one in their folktales is criticized more harshly than the proud girls who resist marriage in their youth.

ズニの性文化を論じた箇所の1節だが、ここでは民間伝承のなかとはいえ、文化規範に反した「生き方」を選ぶ例外的個人の「生に対する態度または姿勢」として “way of life” が用いられているのである。

以上から、ベネディクトは、まだ『文化の諸様式』においては、“way of life” を文化と等置してはおらず、慣習あるいは生に対する態度または姿勢という意味で、すなわち

ミードの回想によると、それはボアズの指導によるもので、ベネディクトは文化あるいは文明の類型を論じる意図はなかった (Mead 1959 : 207-212)。

OED の挙げる (i) および (ii) の意味でこの表現を用いているように思われる。しかし、ベネディクトは「生に対する態度または姿勢」に重点を置いていたものであり、しかも、その一貫性を強調したのである。ミードは、『文化の諸様式』の帯の文言や宣伝文句について、ベネディクトが出版社と何度かやりあったことに触れ、ベネディクト自身が書いて出版社に送ったものとして次のような文章を採録している (Mead 1959 : 212, 強調は引用者) :

In a straightforward style, the author demonstrates how manners and morals of these tribes, and our own as well, are not piecemeal items of behavior, but *consistent ways of life*. They are not racial, nor the necessary consequence of human nature, but have grown up historically in the life history of the community.

ズニも、ドブも、クワキウトルも、そしてアメリカ人も、それぞれの共同体の歴史を通して創り上げてきた一貫した“way of life”としての行動様式と道徳とを持っているということを率直に実証するのが『文化の諸様式』の目的なのだと、ベネディクト自身が書いていたことになる。ランフェールの解説は正鵠を射ているわけである。

Ⅲ ジョン・デューイと“way of life”としての民主主義

本節では、“way of life”という表現に新たな意味づけを与える知識人の動きが、人類学の外にあったことを確認したい。筆者が注目するのは、1930 年代後半になって、プラグマティズムの泰斗ジョン・デューイ (John Dewey) が民主主義を守るべき“way of life”であると論じたことである (Dewey 1987 [1937], 1988 [1939])。

その背景には、第 1 次世界大戦以後の世界の激動がある。ロシア革命による社会主義政権の誕生と国際共産主義運動の拡大、イタリアにおけるファシスト党の勢力拡大とムッソリーニの権力掌握、ドイツにおけるワイマール体制の崩壊とナチスの台頭、そしてスペイン内戦とフランコ政権の誕生と、ヨーロッパは大きく揺れ続けた。

その影響はアメリカにも及び、アメリカ知識人にとって、共産主義とファシズムとが、アメリカの自由と民主主義に対する脅威と認識されるようになっていった。共産主義やファシズムという「全体主義 (totalitarianism)」に対抗して、アメリカの自由と民主主

義を守らなければならないという気運が次第に高まっていったのである。

そのような気運のなかで、民主主義は単なる政治制度ではなく“way of life”であるし、そうでなければならないという主張が出現する。1925年には哲学者で政治家のトマス・ヴェルナー・スミス (Tomas Vernor Smith) が *The Democratic Way of Life* (Smith 1926) を、1937年には教育哲学者のボイド・ヘンリー・ボード (Boyd Henry Bode) が *Democracy as A Way of Life* (Bode 1937) を、それぞれ上梓している。しかし、なんといっても世間の注目を集めたのは、プラグマティズムの重鎮ジョン・デューイの発言であった。そこで、デューイの考える“way of life”とは何かを、「民主主義と教育行政」(Dewey 1987 [1937]) および「創造的民主主義——眼前の課題」(Dewey 1988 [1939]) に探ることとする。

「民主主義と教育行政」において、デューイは先ず次のように述べる (Dewey 1987 [1937]: 217, 挿入と強調は引用者):

It [democracy] is, as we often say, though perhaps without appreciating all that is involved in the saying, a *way of life*, social and individual.

ここで、デューイが民主主義とは社会的かつ個人的な“way of life”だと述べていることに注意しよう。

次いで、デューイはこう述べる (Dewey 1987 [1937]: 219, 強調は引用者):

After democratic political institutions were nominally established, *beliefs and ways of looking at life and of acting* that originated when men and women were externally controlled and subjected to arbitrary power, persisted *in the family, the church, business and the school*, and experience shows that as long as they persist there, political democracy is not secure.

この文章から分かることは、民主主義が“way of life”になるためには、家族、教会、職業、学校など生活の全般において、民主主義的な「信念、生に対する見方、行為の仕方 (beliefs and ways of looking at life and of acting)」が貫徹されなければならないということである。すなわち、「最も広い意味での市民としての感情と思考と行為の習癖 (the habits of feel-

ing, thought and action of citizenship in the broadest sense of that word)」(Dewey 1987 [1937]: 221) が民主的でなければならないのだ。

最後に、デューイは言う (Dewey 1987 [1937]: 225, 挿入と強調は引用者):

Wherever it [political democracy] has fallen it was too exclusively political in nature. It had not *become part of the bone and blood of the people in daily conduct of its life*. Democratic forms were limited to Parliament, elections and combats between parties. What is happening proves conclusively, I think, that unless *democratic habits of thought and action are part of the fiber of a people*, political democracy is insecure. It can not stand in isolation. It must be buttressed by *the presence of democratic methods in all social relationships*.

民主主義が“way of life”であるためには、民主主義が「人々が日常生活を営むなかで骨となり血となっている (become part of the bone and blood of the people in daily conduct of life)」こと、「民主的な思考と行為の習癖が一国民の資質の一部になっている (democratic habits of thought and action are part of the fiber of a people)」こと、そして「あらゆる社会関係における民主的な手法の存在 (the presence of democratic methods in all social relationships)」が不可欠なのである。

以上より、デューイの考える“way of life”とは、「一国民の資質の一部になっている思考と行為の習癖」であり、その社会を特徴づけるような「信念、生に対する見方、行為の仕方」であり、「最も広い意味での市民としての感情と思考と行為の習癖」であると同時に、個人にとっても「日常生活を営むなかで骨となり血となっている」もので、その個人の品性 (character) を形成し、人生の目的を決定するものだということになる。

このような“way of life”の捉え方は、先に述べたサピアの「本物の文化」という考え方に極めて近いと筆者は考える。デューイは、民主主義が「本物の文化」にならなければアメリカ社会は真の民主主義社会とは言えないと主張しているように見えるのである⁷。

「創造的民主主義——眼前の課題」(Dewey 1988 [1939])は、1939年10月20日、デュー

⁷ サピア自身は、産業化されたアメリカ社会、特にその経済生活は個人の創造性を疎外する「偽物の文化」だと考え、文学や芸術の領域のみに「本物の文化」の可能性を見ていた (Sapir 1924)。

イの 80 歳祝賀会においてホレイス・カレン (Horace Kallen) によって代読された講演原稿である。その年の 9 月ドイツとソ連のポーランド侵攻が始まっていた。世界大戦の予感のなかで、デューイは民主主義の危機をひしひしと感じていたに違いない。

この講演でデューイは、個人の “way of life” としての民主主義の重要性を強調している (Dewey 1988 [1939] : 226, 強調は原文) :

... we realize in thought and act that democracy is a *personal* way of individual life ; that it signifies the possession and continual use of certain attitudes, forming personal character and determining desire and purpose in all the relations of life.

すなわち、民主主義は個人の態度として内面化され、内面化された民主主義が、個人の品性 (character) を形成し、人生の目的を決定するのである。

この点でも、デューイの論調はサピアを髣髴させる。サピアにとって、共同体の “way of life” が同時に個人の “way of life” であり、その “way of life” を創造的に生きることを通して個人が内的な充実感や霊的な達成感を抱くことができてこそ、その “way of life” は「本物の文化」なのであった。デューイもまた、アメリカ社会の “way of life” としての民主主義を個々のアメリカ人が自身の “way of life” として主体的かつ創造的に生きることを構想しているのである。

さらに、共産主義とファシズムを意識しつつ、デューイは民主主義を “other ways of life” と対比し、次のように述べる (Dewey 1988 [1939] : 229-230, 強調は引用者) :

Democracy as compared with *other ways of life* is the sole way of living which believes wholeheartedly in the process of experience as end and as means ; as that which is capable of generating the science which is the sole dependable authority for the direction of further experience and which releases emotions, needs, and desires so as to call into being the things that have not existed in the past. For *every way of life that fails in its democracy* limits the contacts, the exchanges, the communications, the interactions by which experience is steadied while it is also enlarged and enriched.

ここで表明されているデューイのプラグマティズム思想とアメリカ人類学の関係を問う

ことは、本稿の課題ではない⁸。ここで注目したいのは、デューイが民主主義とは異なる他の“way of life”が複数存在することを想定しているという点である。

既に述べたように、デューイが意識しているのは共産主義やファシズムなどの「全体主義」体制である。そうすると、“way of life”としての民主主義がアメリカ社会を特徴づけるとすれば、“way of life”としての全体主義がソビエト支配下のロシア社会やナチス支配下のドイツ社会を特徴づけることになる。全体主義もまたドイツやロシアの「本物の文化」だとデューイが捉えていたと言えるかどうか定かではないが、全体主義と民主主義との対立は単なる政治体制の違いを超えた、より深い文化的対立だとデューイが考えていたことは確かである。

以上のような“way of life”の捉え方を、アメリカの知識人層に広めるうえで、ジョン・デューイの果たした役割は極めて大きかったと思われる。そして、このような“way of life”の捉え方が、サピアの「本物の文化」論、その影響を受けたマーガレット・ミードやルース・ベネディクトの文化観と非常に親和的であったために、第二次世界大戦中から戦後にかけて、ボアズ派の人類学者に浸透していったのではないだろうか。この点を、次に検討したい。

Ⅳ 第2次世界大戦期における“way of life”の用法

第2次世界大戦勃発後の1940年、著名な宗教家、学者、作家や批評家らが“Conference on Science, Philosophy and Religion in Their Relation to the Democratic Way of Life”という会議を組織し、年1回シンポジウムを開催するようになった。フランツ・ボアズも発起人に名を連ね、多くの人類学者がシンポジウムに参加した（Hegeman 1999: 160-162; Gilkeson 2010: 189）。ここでは、会議の名称に“the Democratic Way of Life”という表現が含まれることに注目したい⁹。この名称が象徴するように、第2次世界大戦は異なる

⁸ デューイは、コロンビア大学では同僚としてフランツ・ボアズと親交があり、ボアズ派の人類学の影響を受けてもいた。また、デューイは、ベネディクトやミード、そして後に取り上げるハースコヴィッツらに深い影響を与えている。ベネディクトやハースコヴィッツの著作には、ウィリアム・ジェイムズの影響も見られる。プラグマティズムと初期アメリカ人類学の関係、特にジェームズらプラグマティストの多元主義と文化相対主義の関係については、いずれ稿を改めて論じたい。

⁹ これはスミスの1926年の著書のタイトルそのままである。デューイも1939年の「創造的民主主義——眼前の課題」のなかで“the democratic way of life”という表現を使っている（Dewey 1988 [1939]: 227-228）:

“ways of life”の間の闘争だという認識が広まっていったのである。

そして, “the Democratic Way of Life”こそが“the American way”であると言われるようになっていく。その徴候は, 早くも 1941 年春, *Kenyon Review* に掲載された特集 “The American Culture: A Symposium” (Coulborn, Kluckhohn and Bishio 1941) に見られる。この特集に参加した人類学者のクライド・クラックホーンの担当部分は, いみじくも “The Way of Life” と題されており, その内容はアメリカ文化論・アメリカ人論と呼ぶべきものである。なお, この論考は後の『人間のための鏡』第 9 章「人類学者の見るアメリカ合衆国」(Kluckhohn 1949a: 228-261) に組み込まれているので, その内容については次節で同書を論じる際に取り上げる。

さらに, 日本の真珠湾攻撃をきっかけにアメリカが第 2 次世界大戦に参戦すると, 人類学者たちの多くがアメリカの戦争政策に動員されていく (Patterson 2001: 93-95)。マーガレット・ミードは, 真珠湾直後の 1942 年に『火薬を湿らせるな』(Mead 2000 [1942]) と題する「戦争協力本」を出版している。また, 戦争情報局 (Office of War Information) の一員としてルース・ベネディクトが日本研究を行い, その「成果」が戦後 1946 年に『菊と刀』(Benedict 2005 [1946]) として出版されてアメリカのみならず日本でも大きな反響を呼んだことは, 周知の通りである。

第 2 次世界大戦末期になると, 戦後を見据え, 世界平和の可能性をめぐる論議がアメリカ知識人の間で始まる。たとえば, 先に触れた “Conference on Science, Philosophy and Religion in Their Relation to the Democratic Way of Life” は, 4 回目のシンポジウムを 1943 年に開いているが, その主題は「世界平和への様々なアプローチ」であった (Bryson, Finkelstein, MacIver [Eds.] 1944)。このシンポジウムでは, クライド・クラックホーンが「人類学的研究と世界平和」(Kluckhohn 1944) と題して報告しており, その内容は後に『人間のための鏡』第 10 章「人類学者の見る世界」(Kluckhohn 1949a: 262-289) に組み込まれているので, 次節で同書を論じる際に取り上げる。

1944 年には人類学者たちを中心とするシンポジウムが開かれ, 翌年に『世界危機のなかの人間の科学 (The Science of Man in the World Crisis)』と題して出版される (Linton

Intolerance, abuse, calling of names because of differences of opinion about religion or politics or business, as well as because of differences in race, color, wealth or degree of culture are treason to *the democratic way of life*. For everything which bars freedom and fullness of communication sets up barriers that divide human beings into sets and clique, into antagonistic sects and factions, and thereby undermines *the democratic way of life*.

[Ed.] 1945)。本書において、フランツ・ボアズのコロンビア大学教授職を継いだラルフ・リントン (Ralph Linton) が文化は “way of life” であると明確に述べており、クライド・クラックホーンが共著者のウィリアム・H・ケリー (William H. Kelly) とともに、この考え方を敷衍する「文化の概念」という章を執筆している (Kluckhohn and Kelly 1945)。

そこで、以下、ミードの『火薬を湿らせるな』、ベネディクトの『菊と刀』、そしてリントン編『世界危機のなかの人間の科学』における “way of life” の用法を検討することとする。

1. 『火薬を湿らせるな』

ミードは、人類学の視点からアメリカ人とアメリカ文化の「強みと弱み」を明らかにし、その「強み」を「社会工学的」に活用して戦争目的完遂に寄与することを目指して本書を執筆している。

そのため、最初に序論で人類学の視点を説明しているのだが、その説明のなかで、次のように文化と “way of life” を等置している (Mead 2000 [1942]: 1, 強調は引用者):

The dispassionate study of *culture*, of the *whole way of life of a people* seen as a dynamic pattern, is dependent upon a degree of detachment which no one can attain concerning his own society and remain a normal, participant member of that society.

ここでミードは同時に自文化研究の難しさを表明しているが、その難しさを克服する道具を人類学者は備えていると彼女は言う (Mead 2000 [1942]: 2, 強調は引用者):

... the anthropologist wears forever *another set of lenses*, a new set for each primitive culture which he has been examined. With these lenses, acquired in the long months in which he minutely studied *strange ways of life* ... the anthropologist sees different things about the home culture from those things which others see who have never had to submit to this special discipline.

異文化のフィールドワークを通して獲得した「新しいレンズ」¹⁰をアメリカ社会に向けることで、“the American way of life” (Mead 2000 [1942]: 3) に関して人類学者（すなわちミード）は独自の視点を提供できると言うのである。ミードが提示するアメリカ像が如何なるものかは、本稿の問うところではない。本稿で筆者が注目するのは、彼女がアメリカ文化を単一の“way of life”と捉え、これを全体主義という単一の“way of life”と対比していることである。ミードは言う (Mead 2000 [1942]: 108, 強調は引用者) :

When we say we have to fight and *win the war the American way*, we aren't making a vague moral statement about the superiority of *democracy as a way of life* over *totalitarianism as a way of life*. . . . We are saying something more. We are saying *a war fought by a democracy has a certain style*, . . .

さらに、ミードは次のように述べる (Mead 2000 [1942]: 128, 強調は引用者) :

We talk about *saving the American way of life*—and this stands for a number of vague things such as refrigerators and automobiles and marrying whom you like and working for whom you like and not having to be regimented and wrapped up in yards of government red tape. Or it may mean something more; it may mean *saving the dynamic principle* which associates success and goodness.

そうすると、“way of life”とは、何らかの「動的な原則 (dynamic principle)」でもあるということになる。そして、それは日常生活から戦争の遂行方式まで貫く原則なのである。

2. 『菊と刀』

ベネディクトは、本書で如何なる文化の定義も提示していないし、文化と“way of

¹⁰ レンズの比喩は、言うまでもなくフランツ・ボアズの「文化メガネ」論 (沼崎 2016: 140-141) を受け継ぐものだ。後にルース・ベネディクトも『菊と刀』でレンズの比喩を用いている (Benedict 2005 [1946]: 14-15, 17)。しかし、ミードとベネディクトのレンズの比喩の用い方は、ボアズと決して同一ではない。この違いは、ボアズ派人類学のもうひとつのアメリカ的転回を示唆するのであるが、この点については次稿で論じることとする。

life”を明確に等置してもいい¹¹。しかし、本書中 26 箇所の “way of life” の用法 (Benedict 2005 [1946] : 5, 9, 15, 16, 17, 28, 42, 45, 46, 57, 58, 64, 76, 78, 87, 94, 96, 134, 150, 178, 294, 295) を通覧すると、ベネディクトが日本人は単一の “way of life” を生きていると捉えていることは明らかだ。

そして、ベネディクトは日本人の “way of life” が立脚する「諸前提 (assumptions)」を解明しようとする (Benedict 2005 [1946] : 13, 17)。なぜなら、「異国を理解しようとする試みにおいては、その国民の習癖と諸前提に関する体系的な質的研究が肝要 (In trying to understand another country, systematic qualitative study of the habits and assumptions of its people is essential)」(Benedict 2005 [1946] : 18) だからである。

ベネディクトが発見した日本の “way of life” の諸前提は「秩序と階層 (order and hierarchy)」であり、それはアメリカの “way of life” が前提とする「自由と平等 (freedom and equality)」の対極にある (Benedict 2005 [1946] : 43)。ベネディクトは、次のようにも述べている (Benedict 2005 [1946] : 95-96, 強調は引用者) :

The Japanese, therefore, order their world with constant reference to hierarchy. . . . As long as ‘proper station’ is maintained the Japanese carry on without protest. They feel safe. . . . It is as characteristic of their judgment of life as trust in equality and free enterprise is of the American way of life.

ここでも、ベネディクトの日本理解の妥当性は、本稿の問うところではない。本稿で筆者が注目するのは、ベネディクトが「秩序と階層」という諸前提に立脚した日本文化を「自由と平等」という諸前提に立脚した “the American way of life” と対比していることである。

ミードは、『火薬を湿らせるな』において、「未開人」に関する人類学的知見と対照しつつ、守るべき “the American way of life” を描こうとした。これに対して、ベネディクトは、『菊と刀』において、アメリカ人読者が第 2 次世界大戦中に自覚を深めた “the American way of life” と対比しつつ、その対極にある “way of life” として日本文化を描く

¹¹ ベネディクトが文化と “way of life” を明確に等置するのは、1947 年アメリカ人類学会における会長退任講演においてである (Benedict 1948 : 589, 強調は引用者) :

But man is a species which can create his *way of life*, —his culture.

うとしたのである。

第2次世界大戦は民主主義的な“way of life”と全体主義的な“way of life”との闘いなのだと言説が広まっていたからこそ、アメリカ人にとって最も不可思議な全体主義国家である日本の文化を、アメリカ文化とは対照的な、しかし理解可能な一貫性ある“way of life”として描いたベネディクトの『菊と刀』は大きな反響を呼んだのであろう。そして、ミードの『火薬を湿らせるな』とともに、ベネディクトの『菊と刀』は、文化は“way of life”であるという捉え方の普及に大いに貢献したわけである。

3. 『世界危機のなかの人間の科学』

本書は、第2次世界大戦後の世界を見据えて、人間の科学すなわち人類学がどのような知的貢献をすることができるかを論じたものである。

ラルフ・リントンは、冒頭の「人類学の視野と諸目的」と題する章において、次のように述べる (Linton 1945a : 10, 強調は引用者) :

Ethnology deals with *the ways of life of societies* which are still extant or, at most, so recently extinct that fairly complete records are available. *Each society has its own way of life*, called its “culture” by anthropologists.

本書の編者であるリントンが冒頭の章で文化は“way of life”であると明言しているのであるから、この考え方は本書に寄稿しているシンポジウム参加者に共有された観念であると見て間違いはないだろう¹²。

「文化の概念」と題する章で、クラックホーンとケリーは、次のように述べている (Kluckhohn and Kelly 1945 : 84, 強調は引用者) :

¹² 『世界危機のなかの人間の科学』と同じく 1945 年に出版された『パーソナリティの文化的背景』(Linton 1945c) では、リントンは次のように述べている (Linton 1945c : 30, 挿入と強調は引用者) :

This human environment [of an individual] consists of an organized group of other individuals, that is, a society, and of a *particular way of life which is characteristic of this group, that is, a culture*.

したがって、ひとつの社会は、その社会を特徴づける特定の“way of life”すなわちひとつの文化を持つのである。

... by culture we mean those historically created definitions of the situation which individuals tend to acquire by virtue of participation in or contact with groups which tend to share *ways of life which are in some respect distinctive*.

また、クラックホーンとケリーは、次のようにも述べる (Kluckhohn and Kelly 1945 : 97, 強調は原文) :

By culture we mean all those historically created designs for living, explicit and implicit, rational, irrational, and nonrational, which exist at any given time as potential guides for the behavior of men.

以上から、“way of life”としての文化は、集団を特徴づける独自性を備え、その集団に属する人間を導く「生き方のデザイン (designs for living)」なのだということが分かる。

さらに、“way of life”としての文化は、それを生きる人々にとっては価値あるものであって、異なる“way of life”を知ることは、その文化を生きる人々の行動の予測を可能にするだけでなく、その“way of life”を尊重することで友好的な関係の構築をも可能にすると、クラックホーンとケリーは言う (Kluckhohn and Kelly 1945 : 104, 強調は引用者) :

The conception of culture also encourages paying attention to *the more concrete aspects of ways of life other than our own*. It suggests, for example, the usefulness of knowledge of alien “customs” if we wish to predict how a foreign people will behave in a certain situation and of *respect for these same customs if we wish to get along with that foreign people*.

他者の“way of life”の尊重は、平和への道なのだ。これはクラックホーンとケリーの主張の要点であり、次節で取り上げる『人間のための鏡』(Kluckhohn 1949a)でクラックホーンによってより詳しく展開される。

リントンは、『世界危機のなかの人間の科学』に「文化という視点から見た現在の世界状況」と題する章も寄稿している。この文章は、人類文化の発展史を概観しながら将来を展望するという壮大なものだが、最後に共産主義とファシズムについて、次のよう

に予言している (Linton 1945b : 220-221) :

Both the Communist and Fascist systems include numerous features unacceptable to those reared in the Western traditions of individual freedom of thought and action and of tolerance. . . . It seems highly improbable, therefore, that either Fascism or Communism will become permanently established in Western Europe, still less in America. . . . these movements, in their present form, will find their place in history as little more than initial experiments in social planning, the first halting and unsuccessful attempts at a conscious rebuilding of civilization in the face of new conditions.

予言の当否は、ここでは問うまい。注目すべきは、このリントンの予言にも、第2次世界大戦を全体主義と民主主義の闘争、ふたつの異なる“ways of life”の間の闘争と位置づけたアメリカ知識人の戦争観が色濃く反映されているということだ。

V “Way of Life” という文化定義の普及

第2次世界大戦直後の1940年代後半、文化とは“way of life”であるという考え方を人類学内外に広めるうえで大きな役割を果たしたのは、メルヴィル・J・ハースコヴィッツ (Melville J. Herskovits) の『人間とその所産——科学としての文化人類学』(Herskovits 1948)¹³ とクライド・クラックホーンの『人間のための鏡——人類学と現代生活の関係』(Kluckhohn 1949a) であろう。ハースコヴィッツの『人間とその所産』は大部の教科書である。これに対して、クラックホーンの『人間のための鏡』は一般向けの啓蒙書であり、後に安価なペーパーバック版が多くの版を重ね、何カ国語にも翻訳されて広く世界で読まれた¹⁴。

¹³ 本書の改定縮約版が『文化人類学』と題して1955年に出版されている (Herskovits 1955)。さらに、改訂版を大幅に縮約した第3版が『文化の動態』と題して1964年に出版されている (Herskovits 1964)。したがって、本書は一定の影響力を長くアメリカ人類学に及ぼしたと考えてよい。

¹⁴ ただし、他国の人類学に対する本書の学術的な影響は限定的だったと思われる。文化は“way of life”であるという思想は、すぐれてアメリカ的なものと言えよう。日本でも、1971年に2種類の抄訳が出版されている。光延明洋訳 (クラックホーン 1971a) は、原書の第9, 10章を割愛して第1章から第8章および付録を訳出している。光延によると、割愛の理由は「人類学全般の紹介という主旨をやや離れた試論的な性格のものであり、また、執筆当時のアメリカ国内事情や国際情勢についての議論が多

1. 『人間とその所産』

本書第 3 章「文化と社会」の冒頭、ハースコヴィッツは次のように述べる (Herskovits 1948 : 29, 強調は原文) :

A culture is the way of life of a people ; while a society is the organized aggregate of individuals who follow a given way of life.

そして、第 37 章「文化の理論」では、次のように述べている (Herskovits 1948 : 625, 強調は引用者) :

... culture is essentially a construct that describes the total body of belief, behavior, knowledge, sanctions, values, and goals *that mark the way of life of any people.*

したがって、“way of life” は、その民族の生き方を特徴づける信念、行為、知識、価値を含むことになる。いささか網羅的な説明だが、“way of life” とは、それを有する民族自身が価値を置く「特徴ある生き方」だという点が重要である。

最終章である第 38 章「世界社会における人類学」のなかに、次のような 1 文がある (Herskovits 1948 : 653, 強調は引用者) :

If a world society is to emerge from the conflict of ethnocentrism we call nationalism, it can only be on a basis of live and let live, a willingness to recognize the values that are to be found in the most diverse ways of life.

世界平和を実現するには、様々な“way of life”のそれぞれに価値を認め、共存 (live and let live) することが必要だとハースコヴィッツは訴える。なぜなら、「どの民族にも存在する自分たちの“way of life”に対する強い愛着 (the devotion of every people to its

く、理論的には一章～八章の内容と重複するところもある」からであった (光延 1971 : 6)。しかし、この割愛が正確なクラックホーン理解を妨げたのではないか。外山・金丸訳 (1971b) は、新書という体裁もあり、原書の第 1, 2, 5, 6, 8 章のみを訳出している。これも、クラックホーン理解を不十分なものとする要因となったのではないか。

way of life)」と、「全ての諸文化の有する本質的な尊厳 (the essential dignity of all human cultures)」とを認めざるをえないからである (Herskovits 1948 : 653)。ハースコヴィッツは、多様な “ways of life” のそれぞれに「それ自身の基準に従って価値と尊厳が認められなければならない (must each be accorded worth and dignity in its own terms)」(Herskovits 1948 : 627) とも言う。

その生き方を生きる人々自身にとって、価値と尊厳のある独特の生き方が、“way of life” なのであり、それゆえに、それはひとつの独自の文化として、他者による尊重と寛容を要請するのである。

2. 『人間のための鏡』

ルース・ベネディクトの『文化の諸様式』以上に人類学的な文化概念の普及に貢献した本があるとすれば、それは本書であろう。そして、本書が普及した文化概念が、“way of life” というものであった。

本書第2章「奇妙な慣習」の冒頭、クラックホーンは次のように問う (Kluckhohn 1949a : 17) :

WHY DO the Chinese dislike milk and milk products ? Why would the Japanese die willingly in a Banzai charge that seemed senseless to Americans ? Why do some nations trace descent through the father; others through the mother, still others through both parents ?

その答えは、本能の違いでもなく、神の定めでもなく、気候の違いでもなく、「育ち」の違いであり、それが文化だとクラックホーンは言う (Kluckhohn 1949a : 17)。そして、有名な文化の定義が提示される (Kluckhohn 1949a : 17, 強調は引用者) :

By “culture” anthropology means *the total life way of a people*, the social legacy the individual acquires from his group.

ひとつの民族の “life way” すなわち “way of life” の総体が、文化なのである。さらに、クラックホーンは次のように述べる (Kluckhohn 1949a : 35-36, 強調は引用者) :

Each different way of life makes its own assumptions about the ends and purposes of human existence, about what human beings have a right to expect each other and from the gods, about what constitutes fulfillment or frustration. Some of these assumptions are made explicit in the lore of the folk ; others are *tacit premises* which the observer must infer by finding consistent trends in word and deed.

諸前提 (assumptions) という語は、ベネディクトの『菊と刀』を思い出させる¹⁵。クラックホーンは、それぞれの“way of life”の背後には「ひとつの統合する哲学 (a unifying philosophy)」があるとも言う (Kluckhohn 1949a : 202)。

それぞれの民族あるいは国民は、独自の哲学に裏打ちされ、生の目的と目標を指し示す“way of life”を持っている。そのような“way of life”が文化なのだと、クラックホーンは言うわけである。

ここまでは一般論であるが、戦時中の論考を書き改めた第 9, 10 章で、クラックホーンはアメリカ文化の問題と、戦後世界の問題とを取り上げる。そこでも、“way of life”という概念は重要な役割を演じるのである。

第 9 章「人類学者の見るアメリカ合衆国」が提供するのとは、“the American way of life”の「人類学的なスナップ写真」である (Kluckhohn 1949a : 239)。自文化のスナップ写真をアメリカ人読者に見せようとする理由は、次のようなものだ (Kluckhohn 1949a : 239) :

No amount of knowledge of Russian or Chinese culture will avail in the solution of our international problems unless we know ourselves also. If we can predict our reactions to a probable next move in the Russian gambit and have some clues as to why we shall react in that manner, the gain to self-control and toward more rational action will be tremendous.

¹⁵ クラックホーンは、自身が理論的にベネディクトに負うところは非常に大きいと述べ、特に『菊と刀』については、1946年に占領軍の一員として日本に赴任する以前から「非常に高く評価していた」が、1年後に日本を離れる際には「絶大なる畏敬の念を抱くに到った」と回想している (Kluckhohn 1949b)。

ロシアと中国が名指しされているのは、もちろん既に冷戦が始まっているからである。しかし、クラックホーンが強調するのは、自分の“way of life”の諸前提、特に暗黙の前提 (tacit premises) を知らなければ、異なる“way of life”と理性的につき合うことはできないという点である。そのために、“the distinctive American Way”のなかで「堅実で創造的なもの (what is sound and creative)」を見出すことが大切なのである (Kluckhohn 1949a : 260)。

第 10 章「人類学者の見る世界」では、人類学的な“way of life”の理解がどのように世界平和に貢献しうるかが論じられる。

第 1 に、“other ways of life”に対して「人類学的態度は寛容を要請する (The anthropological outlook demands toleration)」¹⁶ (Kluckhohn 1949a : 268)。なぜなら、人類文化の豊かな多様性は「世界の良き生にとって測り知れぬほど貴重な財産 (invaluable assets for good life in the world)」 (Kluckhohn 1949a : 268) だからである。

そして第 2 に、人類学は“way of life”の「違いが争いを生まない世界」の構築に寄与しなければならない¹⁷：

So the world must be kept safe for differences. Knowledge of the problems of others and of alien ways of life must become sufficiently general so that positive toleration becomes possible.

さらに、クラックホーンは言う (Kluckhohn 1949a : 287, 強調は引用者)：

¹⁶ ただし、これには「それらが世界秩序を保つという希望を脅かさない限りにおいて (so long as they do not threaten the hope for world order)」 (Kluckhohn 1949a : 268) という限定がつく。明らかにナチズムを意識した限定である。

¹⁷ 実は、ベネディクトも、『菊と刀』において人類学の目的は「違いが安んじて受け入れられる世界 (a world made safe for differences)」の実現だと述べている (Benedict 2005 [1942] : 15)。ベネディクトは言及していないが、クラックホーンは 1943 年のシンポジウムの報告で既に“The world must be made safe for differences” (Kluckhohn 1944 : 150) と述べており、この表現の生みの親はクラックホーンである。桑山敬己は、2016 年 11 月 8 日付の筆者宛私信で、このクラックホーンの表現は 1917 年に対ドイツ宣戦布告を議会に求めたウッドロー・ウィルソン大統領の有名な台詞 “The world must be made safe for democracy” の焼き直しであろうという重要な指摘を行っている。このウィルソンの台詞は広く人口に膾炙し、知識人の間で論議的となったから、クラックホーンが知らなかったはずはない。焼き直しとはいえ、“democracy”を“differences”に置き換え、文化的差異一般への寛容、すなわち多様な“ways of life”への寛容をクラックホーンが訴えたことは、世界平和を脅かさない限りにおいてという条件付きとはいえ、文化相対主義者の面目躍如と言えよう。

As a consequence of their cross-cultural research anthropologists are freer to disbelieve something that appears, even to their fellow scientists of the same culture, necessarily true. In the present stage of world history *the apparently unbridgeable gap between several powerful and competing ways of life* can be surmounted only by those who can constructively doubt the traditionally obvious.

クラックホーンの構想する人類学は、異なる“ways of life”に架橋し、「違いが争いを生まない世界」を構築することに少しでも寄与しただろうか。人類学者は、建設的に懐疑的でありえただろうか。21 世紀の今日、世界の現状を見るにつけても、クラックホーンの目指した人類学は、未完のプロジェクトだと言わざるをえないようである。

お わ り に

以上、1920 年代から 1940 年代にかけて、フランツ・ボアズの後継者たちが文化とは特定の社会の独自の“way of life”であるという考え方を確立した過程を辿ってきた。フランツ・ボアズの思想を受け継ぎながらも、サピア、ベネディクト、ミード、リントン、ハースコヴィッツ、クラックホーンらは、ジョン・デューイの思想や第 2 次世界大戦時の思潮に大きな影響を受けつつ、ボアズの文化概念をアメリカ的に転回させて、個々の民族あるいは国民は独特の尊厳ある“way of life”を持っており、それは互いに尊重すべきものなのだという観点に到達したのであった。そして、異なる“way of life”が互いに寛容であることによって「違いが争いを生まない世界」が実現され、世界平和が維持されるのであって、異なる“way of life”の研究と理解をその生業とする人類学は、そのために大いに有用なのだという主張が、第 2 次世界大戦後に行われたのであった。

最後に、筆者が“way of life”を「生の流儀」と訳したい理由であるが、それはもはや明らかであろう。“way of life”は生活様式と訳されることが多いが、それでは“mode of life”と差異化できない。そして、文化を“way of life”と定義する人類学者たちは、リントンにせよ、ハースコヴィッツにせよ、クラックホーンにせよ、その独自性、それも生に対する基本的な態度としての独自性を強調している。つまり、“way of life”とは独特の生き方なのである。この点を強調するには、「生の流儀」と訳するのが適切であろう。加えて、流儀という言葉は、流派を連想させる。“way of life”は歴史的に構築され、世

代を超えて受け継がれる。とすれば、独自の“way of life”を継承し、発展させる社会集団は、ひとつの流派と見なせる。最後に、これが一番重要なのであるが、“way of life”は、社会的に共有されるだけでなく、個人によって内面化され、また個人によって主体的かつ創造的に生きられる。個人の人生にも意味と目的を与え、その人らしい、その人流の生き方を可能にするという意味でも、“way of life”は「生の流儀」なのである。

このような文化の定義は、本質主義的であるという批判は免れないであろう。そして確かに、ミードやクラックホーンのアメリカ文化論も、ベネディクトの日本文化論も、文化内の差異と多様性を捨象した「生の流儀」対比になっているのは事実である。しかし、忘れてはならないのは、彼女ら／彼らは、ナチズムに代表される人種主義的本質主義を否定するために闘っていたということだ。生まれではなく育ちが、人種ではなく文化こそが人間行動を規定しているのだと言いたいがために、彼女ら／彼らは「生の流儀」の決定的な影響力を強調したのだった。そうすることで、彼女ら／彼らは、異なる「生の流儀」の間の対立と抗争を如何に解決すべきかという新たな問題に直面した。しかも、その問題の平和的な解決ができなければ、核戦争によって人類が破滅を迎えるという状況の中で、答えを探さなければならなかったのである。そのような時代状況が、彼女ら／彼らに本質主義的な「生の流儀」論を展開させたのではなかろうか。

「生の流儀」としての文化の多元性と、それぞれの「生の流儀」の尊厳の承認および寛容の要請は、ボアズ派人類学のもうひとつの転回を伴っている。それは、自文明の相対性というボアズ思想から、諸文化の相対性という所謂「文化相対主義」への転回である。その様相の解明を次稿で行うことを約して、本稿の結びとしたい。

引用文献

Bailey, Garrick and Peoples, James

2013 *Essentials of Cultural Anthropology*, 3rd edition. Belmont, CA : Wadsworth.

Benedict, Ruth

1948 “Anthropology and the Humanities.” *American Anthropologist*, New Series, 50 : 585-593.

2005 [1934] *Patterns of Culture, with a New Foreword by Louise Lamphere*. Boston and New York : Houghton Mifflin Company.

2005 [1946] *Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, with a New Foreword by Ian Buruwa*. Boston and New York : Houghton Mifflin Company.

ベネディクト, ルース

2008 [1973] 『文化の型』(米山俊直訳), 講談社(学術文庫)。

Boas, Franz

1965 [1938] *The Mind of Primitive Man, Revised Edition, with a New Forward by Melville J. Herskovits.* New York : The Free Press.

Bode, Boyd Henry

1937 *Democracy as A Way of Life.* New York : The Macmillan Company.

Bryson, Lyman, Finkelstein, Louis, and MacIver, Robert M. [Eds.]

1944 *Approaches to World Peace : Fourth Symposium.* New York : Conference on Science, Philosophy and Religion in Their Relation to the Democratic Way of Life, Inc.

Coulborn, Rushton, Kluckhohn, Clyde, and Bishop, John Peale

1941 “The American Culture : A Symposium.” *Kenyon Review*, Vol. 3, No. 2 : 143-190.

Darnell, Regna

2010 *Edward Sapir : Linguist, Anthropologist, Humanist.* Lincoln, NE : University of Nebraska Press.

Dewey, John

1987 [1937] “Democracy and Educational Administration.” Pp. 217-225 in *John Dewey, The Later Works, 1925-1953, Volume 11 : 1935-1937*, edited by Jo Ann Boydston. Carbondale and Edwardsville : Southern Illinois University Press.

1988 [1939] “Creative Democracy—The Task Before Us.” Pp. 224-230 in *John Dewey, The Later Works, 1925-1953, Volume 14 : 1939-1941*, edited by Jo Ann Boydston. Carbondale and Edwardsville : Southern Illinois University Press.

Gilkeson, John S.

2010 *Anthropologists and the Rediscovery of America, 1886-1965.* New York : Cambridge University Press.

Hegeman, Susan

1999 *Patterns for America : Modernism and the Concept of Culture.* Princeton : Princeton University Press.

Herskovits, Melville J.

1948 *Man and His Works : The Science of Cultural Anthropology.* New York : Alfred A. Knopf.

1955 *Cultural Anthropology.* New York : Alfred A. Knopf.

1964 *Cultural Dynamics.* New York : Alfred A. Knopf.

Kluckhohn, Clyde

1944 “Anthropological Research and World Peace.” Pp. 143-152 in *Approaches to World Peace : Fourth Symposium* edited by Bryson, Lyman, Finkelstein, Louis, and MacIver, Robert M. New York : Conference on Science, Philosophy and Religion in Their Relation to the Democratic Way of Life, Inc.

1949a *Mirror for Man : The Relation of Anthropology to Modern Life.* New York : Whittlesey House.

1949b “By Clyde Kluckhohn.” Pp. 18-19 in *Ruth Fulton Benedict : A Memorial.* New York : Viking fund,

Inc.

クラックホーン, クライド

1971a 『人間のための鏡』(光延明洋訳), サイマル出版会。

1971b 『文化人類学の世界——人間の鏡』(外山滋比古・金丸由雄訳), 講談社(現代新書)。

Kluckhohn, Clyde and Kelly, Williams H.

1945 “The Concept of Culture.” Pp. 78-106 in *The Science of Man in the World Crisis*, edited by Ralph Linton. New York : Colombia University Press.

Kroeber, A. L., and Kluckhohn, Clyde

1963 [1952] *Culture : a Critical Review of Concepts and Definitions*. New York : Vintage Books.

Lamphere, Louise

2005 “Foreword to the Mariner Books Edition.” Pp. vii-xii in Ruth Benedict, *Patterns of Culture, with a New Foreword by Louise Lamphere*. Boston and New York : Houghton Mifflin Company.

Linton, Ralph [Ed.]

1945 *The Science of Man in the World Crisis*. New York : Colombia University Press.

Linton, Ralph

1945a “The Scope and Aims of Anthropology.” Pp. 3-18 in *The Science of Man in the World Crisis*, edited by Ralph Linton. New York : Colombia University Press.

1945b “Present World Conditions in Cultural Perspective.” Pp. 201-221 in *The Science of Man in the World Crisis*, edited by Ralph Linton. New York : Colombia University Press.

1945c *Cultural Background of Personality*. New York : Appleton-Century-Crofts, Inc.

Mead, Margaret

1959 “Patterns of Culture : 1922-1934.” Pp. 201-212 in Ruth Benedict, *An Anthropologist at Work : Writings of Ruth Benedict*, edited by Margaret Mead. Boston : Houghton Mifflin Company.

2000 [1942] *And Keep Your Powder Dry : An Anthropologist Looks at America with an Introduction by Hervé Varenne*. New York and Oxford : Berghahn Books.

2001 [1928] *Coming of Age in Samoa : A Psychological Study of Primitive Youth for Western Civilisation, with an Introduction by Mary Pipher*. New York : Harper Perennial.

2001 [1930] *Growing Up in New Guinea : A Comparative Study of Primitive Education, with an Introduction by Howard Gardner*. New York : Harper Perennial.

2005 [1959] “Preface.” Pp. xiii-xxvi in Ruth Benedict, *Patterns of Culture, with a New Foreword by Louise Lamphere*. Boston and New York : Houghton Mifflin Company.

光延明洋

1971 「人間の鏡としての人類学——訳者まえがき」クライド・クラックホーン『人間のための鏡』(光延明洋訳), サイマル出版会, 3-8 ページ。

Morgan, Lewis Henry

1985 [1877] *The Ancient Society*. Tuscon : University of Arizona Press.

Nanda, Serena and Warms, Richard L.

- 2014 *Culture Counts : A Concise Introduction to Cultural Anthropology*, 3rd edition. Stamford, CT : Cengage Learning.

沼崎一郎

- 2013 「フランツ・ボアズにおける「文化」概念の再検討 (1) —『未開人の心性』1911 年版を中心に」『東北大学文学研究科研究年報』62 : 26-56。
 2014 「フランツ・ボアズにおける「文化」概念の再検討 (2) —『未開人の心性』1938 年版を中心に」『東北大学文学研究科研究年報』63 : 72-104。
 2016 「フランツ・ボアズにおける「文化」概念の再検討 (3) —感情と理性の普遍性と相対性」『東北大学文学研究科研究年報』65 : 131-164。

OED Online

- 2016 “way, n.1 and int.1.” *OED Online*. September 2016. Oxford University Press. <http://www.oed.com/view/Entry/226469?redirectedFrom=way+of+life> (accessed October 09, 2016).

Patterson, Thomas C.

- 2001 *A Social History of Anthropology in the United States*. Oxford and New York : Berg.

Sapir, Edward

- 1924 “Culture, Genuine and Spurious.” *American Journal of Sociology*, 29 : 401-429.
 1985 [1949] *Selected Writings in Language, Culture, and Personality with a New Foreword by David G. Mandelbaum and a New Epilogue by Dell H. Hymes*, edited by David G. Mandelbaum. Berkeley, Los Angeles, London : University of California Press.

Smith, Thomas Vernor

- 1926 *The Democratic Way of Life*. Chicago : University of Chicago Press.

Tylor, Edward B.

- 1881 *Anthropology : An Introduction to the Study of Man and Civilization*. London : MacMillan and Co.

Wirth, Louis

- 1938 “Urbanism as a Way of Life.” *American Journal of Sociology*, 44(1) : 1-24.

Wissler, Clark

- 1923 *Man and Culture*. New York : Thomas Y. Crowell Company.
 1929 *An Introduction to Social Anthropology*. New York : Henry Holt and Company.

Culture as “a Way of Life”: The American Turn of Boasian Anthropology (1)

Ichiro NUMAZAKI

This paper examines the historical process by which the students of Franz Boas gradually adopted the concept of “way of life” as a key component of the definition of culture despite the fact that Franz Boas himself did not use the phrase “way of life” in his major writings let alone in his definition of culture.

It was Edward Sapir who first introduced the concept of “way of life” to characterize his notion of “genuine culture” in opposition to “spurious culture” as sheer manners in his classic article “Culture, Genuine and Spurious” (1924). Margaret Mead used the concept of “way of life” in her early writings such as *Coming of Age in Samoa* (1928) and *Growing Up in New Guinea* (1930) in order to contrast the “primitive” ways of life with the “civilized” or the American way of life. Ruth Benedict also used “way of life” to denote the basic attitude toward life in a particular culture.

Then, in the late 1930s, John Dewey insisted that democracy was not merely a political institution but was a “way of life” that permeated all aspects of everyday life. He implied that the democratic way of life characterized the United States of America in contrast to totalitarian “ways of life” in Fascist and Communist countries.

This theme of the clash of opposing and competitive “ways of life” was highlighted in Margaret Mead’s *And Keep Your Powder Dry* (1942), a treatise on the American way of life and on the character of American people. It was in this book that culture concept was equated with the concept of “way of life” for the first time in American Anthropology. Clyde Kluckhohn also published a short essay on the American “way of life” in Kenyon Review’s special symposium on the American culture (1941).

By 1945, major American anthropologists such as Ralph Linton and Clyde Kluckhohn were defining the anthropological concept of culture as “a way of life.” And this new definition was popularized by Melville Herskovits in his *Man and His Works* (1948) and by Clyde Kluckhohn in his *Mirror for Man* (1949), which was reissued in cheap paperbacks for a number of years and was translated into many foreign languages including Japanese.

In the immediate aftermath of World War II and in the shadow of the cold war, American anthropologists preached that anthropological outlook on diverse “ways of life” demanded tolerance of and respect for alien “ways of life,” each and every one of which had dignity and meaning for the peoples who lived in those ways. They also insisted that anthropologically informed understanding of diverse “ways of life” would foster world peace and that the post-World War II world “must be made safe for differences.”